

# エンジニアの 生き方、働き方は どのように変わったのか

# コロナ禍で

— IT企業の取り組みとエンジニアのリアル —



02..... [まつもとゆきひろ氏 ロングインタビュー]

**「Ruby」を核とした  
松江市のIT産業振興に尽力  
—「前例がないことへの挑戦」**

10..... [GMOインターネット株式会社 GMO kitaQ]  
**チャレンジしたいエンジニア必見！  
—「やってみたい」を叶えに来てほしい**

14..... [クリエーションライン株式会社 富山事業所]  
**「富山への愛」から生まれた事業所ならではの  
自由闊達な雰囲気と抜群のチームワークが自慢**

20..... [株式会社パソナテック 島根Lab]  
**ますます盛り上がりを見せる島根・松江市のIT産業。  
なぜ島根にITエンジニアが集まるのか  
— ちょうど良い環境は価値 —**

# 「Ruby」を核とした松江市のIT産業振興に 尽力―「前例がないことへの挑戦」

Think IT  
White Paper

02

● Think IT 編集部 伊藤 隆司

「ITエンジニアが集まる街」として、長く注目を集めている松江市。昨今のコロナ禍において、特に「二拠点生活」「移住」「ワーケーション」といったキーワードで再注目されているようだ。

その背景にあるのは、2006年から松江市が取り組んでいる「Ruby City MATSUE プロジェクト」の存在だろう。プログラミング言語「Ruby」を核としたIT産業振興を開始し、本プロジェクトをきっかけに松江市に進出したIT企業は40社以上にも及ぶ。松江市の支援制度も手厚く、その内容も高く評価されている。

また「Ruby City MATSUE プロジェクト」で忘れてはいけないのが、Rubyの父、まつもとゆきひろ氏だ。「Rubyといえば松江」というブランディングにまつもと氏の存在は欠かせない。

そこで本記事では、1997年より松江市に移住し、2006年のプロジェクト開始から15周年を迎えた「Ruby City MATSUE プロジェクト」に関わり、現在でもITエンジニアに強い影響力を持つまつもとゆきひろ氏に、「プロジェクトのこれまでとこれから」について聞いたロングインタビューを紹介する。

## まつもとゆきひろ氏ロングインタビュー

### コロナ禍も2年目になりますが、最近はどのような活動をされていますか

**まつもと**：技術的な側面から言うと、私の仕事は大きく3つに分かれています。1つ目は、今後Rubyをどのように進歩させていくかという方向性を決めたり、新機能を追加する際の取捨選択をしたり、といったRubyのデザインの仕事です。

Rubyの開発者コミュニティが随分と育って来たので、私自身がプログラマーとしてRubyに手を加えることはほとんどなくなってきました。Rubyに追加する機能を決めたら、あとはコミュニティのメンバーが実装してくれるので、Rubyのデザイナーやプログラマーとしての仕事はずいぶん減りました。実際にRubyに関してはデザインばかりしている感じですね。

一方で、組み込みを意識した「mruby」については、私がリードプログラマーとして開発を続けています。mrubyは実装の規模も複雑さも、利用されている環境も本家のRuby、いわゆる「CRuby」と言われている、普段皆さんが使用しているRubyに比べると大分コンパクトなプログラムですが、そちらのリードプログラマーとしてソフトウェア開発をしています。これが2つ目です。

3つ目は、さまざまな企業の技術顧問として相談に乗ったり、そのほかに講演をしたり、原稿を書いたりといった仕事ですね。コンサルタントと言うと大げさですが、「ソフトウェア開発に関する問題について、一緒に考えましょう!」というようなことをしています。

あとは、とにかく情報収集。新しい情報を知らないと、適切な判断ができませんからね。ブログやWeb記事などを读んだりしていますが、傍から見ると遊んでいるようにしか見えないという時間があったり(笑)。このようなことを、あるときは開発者、あるときはデザイナーといった帽子を適宜被りつつ切り替

えながら、1日を過ごすという感じになりました。

一昨年までは随分と出張が多くて、海外にも年に5、6回、あとはほぼ毎週のように東京へ行く生活をしていましたが、コロナ禍の始まった昨年の3月ぐらいからはずっと島根にこもって、自宅で仕事をしています。



まつもとゆきひろ氏

### 東京に出張していた頃と今と、どちらが楽しく過ごされていますか

**まつもと：**今の方が圧倒的に快適です。出張をしなくなって気づいたのは、意外と移動で疲れているんだなということ。自宅にいながら、時間になったらPCに向かってオンラインで打ち合わせができるのはすごく楽で良いですね。

コロナ禍以前から、私の活動そのものはオンラインでできていたのですが、お客さんをはじめ、情報を受け取る側が準備できていなかったという理由でオンラインに移行できていませんでした。それがコロナ禍の感染症対策という形で半強制的にオンラインに切り替わったので、これが社会が良い方向に進む圧力のような形で、これからもずっとオンラインが主流になっていくと良いなと思っています。

あと、私は24年前から島根県にいますが、せっかく田舎にいたのにオンラインでは済まない用事で東京へ行って打ち合わせをするということが結構な障害になっていましたので、コロナ禍でその大きな障害の1つが小さくなったというのは感じています。商習慣にもこれが定着すると、地方分散や、地方に住みたいけれど仕方なく東京にいるといった人たちが少なくなるのではないのでしょうか。とは言え「都会の方が社会資本がしっかりしているから良い」という人は当然いるので、そういう人は東京なり大都会なりに住めば良いと思います。

「本当は田舎暮らしがしたいけれども会社が許してくれない」とか「組織が一」とか「仕事がそうは行かないから一」といった理由で、しづしづ東京に住む人が少なくなると良いですね。

ここから、本題に入りたいと思います。2006年に「Ruby City MATSUE プロジェクト」が立ち上がり、今年で15年になります。当時、まつもとさんはどのような思いでプロジェクトに協力したのでしょうか

.....

**まつもと:** 私は玉造温泉というところに住んでいますが、当時は、まだ玉湯町といって松江市ではありませんでした。それが「平成の大合併」で玉湯町が松江市と合併されて松江市になったというのが2005年です。その数ヵ月後に市役所の方が私の会社にいらっしゃって、「Rubyを中心にソフトウェア・ITで産業振興をしたい」とおっしゃったのです。後で話を聞いたのですが、松江市の産業は観光が中心で、農業もあって、工場誘致にも力を入れているが、なかなか難しいという状況でした。つい先日退任された、前松江市長の松浦正敬さんが「観光以外の産業振興がなかなかうまくいかない」と悩んでおられたときに、島根県内のIT企業の8割が松江市にあることに気がついたのです。地方だと、IT産業の主要な顧客は公共団体・地方自治体が多いのですよね。

そうすると、松江市役所と島根県庁のある松江市は「IT産業にとって仕事がある場所」です。そういうこともあり、産業振興にITはすごく良いのではと思われたのですが、産業振興だけなら、誰でもやれるわけですね。

つまり、松江市役所や島根県庁を相手に仕事している以上、パイが決まっているので、それ以上の伸びは期待できません。なので「それだけではない産業振興が必要だ」と市の職員の方が話しておられたときに、「松江市には市役所や県庁と仕事をしていない、Rubyやオープンソースとか、変わったことを中心にやっている企業と、Rubyというプログラミング言語を作った人が住んでいるよ」という話を聞いて「これはもしかしたら、グリップになるかもしれない」と私のところへ来られたようです。

私は1997年に松江へ引っ越して来たので、当時は松江に住み始めて約10年ぐらいの頃でした。私はもともと松江ではなく鳥取県の出身です。松江と鳥取はそれほど離れていませんが、そういう意味で言うと特に鳥根県や松江にあまり郷土愛は感じていませんでした。「広い山陰地方の中では近いよね」くらい(笑)。

なので、もし郷土愛を全面に出されて「地元がピンチなのだから、手伝ってよ」と言われても、それほど心を動かされなかったと思うのですよね。でも、松江市役所の方は「オープンソースなどを中心にして松江市の人達を助け、産業振興もしたい」とおっしゃった。当時、日本全国どの自治体を見ても「オープンソースを中心とした産業振興をする」なんて聞いたことがありませんでした。

でも、Rubyを作った時点で、私はまだ島根県に住んでいませんでしたし、よく「Ruby発祥の地」なんて言われていますが、実際にRubyを作り始めたときは静岡県にいましたからね(笑)。

今でこそ私は松江市に住んでいますが、Rubyを開発している人はたくさんいて、私だけが開発しているわけではありません。私はその中のたくさんのグループのリーダーでしかないので。リーダーがたまたま松江に住んでいるだけで、実際に手を動かしている人の多くは、松江市どころか、島根県どころか、下手すると日本にもいなかったりするわけですね。

そういった中で「松江の産業振興と言っても良いのか」と思ったのですが、一方で、そういったことをやったという前例は世界的に見てもほとんどありません。

例えば、オレゴンにはLinuxを開発したリーナス・トーバルズ氏が住んでいますが、オレゴン州の市長のひとは「Linuxは今、オレゴンで作られています」と言っているくらいで、産業振興のような動きはして

いません。そんな世界的に見ても前例のないことをやってみようという人達の勇気に感銘を受けて「では、お手伝いしましょう!」となったのが当初の経緯です。

**まつもとさんはプロジェクトでどのような役割をされていたか。**

**また、プロジェクトを通じて良かったこと、辛かったことを教えてください**

**まつもと:** いざお手伝いすると決まったとき、「オープンソースを中心にIT産業を振興させようと思ったら、何が良いと思いますか?」とインタビューを受けました。役所の方で良いと思って行動しても、実際に支援してもら側、オープンソースを開発している側にとって嬉しいとは限らないわけです。そもそも発案者がソフトウェア開発者でなければ何が良いのか分からないですからね。

そこで、私からは「直接人と人が繋がれるようなことができる」と提案しました。ソフトウェア開発は場所を選びません。私自身、実際に当時10年ほど島根でRubyの開発に携わっていて、ほとんど問題は感じていませんでしたから。

しかし、自分1人だけで活動するのであれば何も問題はないのですが、エンジニアの研鑽という視点では、なかなか1人では難しい。そうなったときに、島根で何が問題になるかと言うと「技術者密度が低い」ことです。

島根でソフトウェア開発をしている人や、Rubyを使っている人がいても、エンジニアの人口密度が低ければ、出会ったり集まったりする機会もあまり得られません。でも「リアルに会う」ことは、その土地にいないとできない。それならば、島根ならではのことができるのではないかと。それが全部オンラインだったら、島根である必要はないのですよ。

当時からYouTubeはありましたが、オンラインで何とかする方法はあったと思うのですが、それでは松江市に恩恵がないわけです。もちろん、松江市がやる必要もない。そのため「リアルで会ってお互いに高め合えるようなプログラムと施設が必要」とアドバイスしました。施設について言えば、松江市が持っていた施設で使えそうな施設があったので「松江オープンソースラボ」を作っていたのです。

エンジニアたちが集まって交流できる拠点ができたことで、ここ15年間、平日・休日問わずに勉強会やイベントなどが開催されてきたことが、島根県のエンジニアそのものの底上げに繋がって来たのではないかと思います。

例えば、中学生向けにRubyのプログラミング教室を開催し、プログラミングに関心のある子ども達を増やしてきました。10年も経つと、そこで学んだ子どもたちが大学を卒業し、IT企業に就職したとい



「松江オープンソースラボ」にはまつもと氏のパネルが設置されている

うことが、ぼつぼつ出始めてきました。また、毎年開催しているRubyの国際会議「RubyWorld Conference」では、多くの企業に松江へ来ていただき、ビジネスとしてRubyを使う際の情報交換や情報発信をお願いするなど、この15年でさまざまなことに取り組んできました。

近年では、島根県も「Rubyのことは、市と県で協力してやりましょう」と、一緒に色々なことにチャレンジしているところです。

## 15年やってきた中で、松江市・島根県全体の変化を、どのように感じていますか。 また、手応えが感じられた出来事がありましたか

**まつもと:**2006年に比べると、Rubyに関わる企業数は、松江市だけでも10倍以上になっているので、そういう意味ではRubyが一般化したというのがありますし、「島根にパソコンなんてあるわけがない」というのをご存知ですか。2000年に公開された「デジモンアドベンチャー」という映画の登場キャラクターのセリフですが、それから十数年が経過してようやく、ここまで来たという感じですね。

2006年に「Ruby City MATSUEプロジェクト」を始めて数年経った頃から、特にエンジニア界隈で「Rubyの島根」などと言われるようになり、自治体のPRとしては大成功だなと感じています。

島根県や松江市に進出してくださったIT企業も30～40社以上あるので、その点は評価できる一方で、「島根県全体のGDPの中でITの割合がどれくらいあるのか」というと、だいぶ誤差があります。IT企業は1つ1つが小さいので「産業振興としては成果を認められない」と批判的な見方をされる向きもありますが、事実としてその一面はあるだろうなと感じています。

実際に、県内GDPのうちITの割合はひと桁くらいです。それが倍に伸びたとしても1%や2%。「そこに税金を使う価値があるのか」と、県議会や市議会で発言される方もいらっしゃるという話は聞きますが、そうは言っても、産業振興は「やれば必ず成功する」というものでもありません。そういう意味では「成果を上げている」と好意的に見てくださっている方のほうが多いと認識しています。

## さらにこれから15年続けていくとしたときに、 ゴールとして何をを目指すのかという構想があれば教えてください

**まつもと:** だいぶ前から考えているのは、「どうすれば継続していけるのか」ということです。

松江市が「Ruby City MATSUE」とRubyの名前を付けて産業振興事業を始めたときの松浦正敬前市長は、今年の春に退任され、新しく上定昭仁市長が就任されました。また、2007年に島根県知事に初当選され、Ruby City MATSUEプロジェクトに途中から参加いただいた溝口善兵衛前知事は、2019年に知事を退任し、新しく丸山達也知事になりました。

何が言いたいかというと、知事や市長は代わるものです。新しい知事や市長が、前の知事や市長と同じぐらいRubyに興味関心を持ってくださるかは分かりません。そうすると、あまり自治体と「おんぶに抱っこ」の状態だと、知事や市長が代わったタイミングで、今までの努力が水の泡になってしまう可能性があるわけです。ですが「エンジニアには支援が必要だ」「エンジニア同士の交流により、エンジニア自身の生活のクオリティが上がる」というのは大事なことなので、県や市の方針に左右されないようにする必要があります。があると思っています。

松江市はここ10年、オープンソースラボを運営してくださっていて、2018年には全面改装してだいぶ綺麗になっていますが、新しい市の体制によっては「他のことに使うから」と追い出されてしまう可能性

もあります。「ここを追い出されたので、Rubyに関する活動はなくなりました」というのはあまりにも惜しいので、オープンソースラボを活動拠点にしてきたしまねOSS協議会のような団体や、ずっと勉強会を開催してきた有志によるボランティア組織もあるので、毎回場所を変えても継続できるように備えておかないといけないとは考えています。

究極のゴールは、たとえ知事や市長さんが変わっても、私が島根県以外のどこかへ去っても、島根県・松江市に住んでいるエンジニア同士が変わらずに助け合える環境をしっかりと構築する。そのことを頭の片隅において、日々活動していきたいです。

**「リアルなエンジニアの交流」というお話しで、今、コロナ禍で多くのイベントがオンライン中心になってきている中、どのように開催していくかが課題になっていると思います。リアルなら東京と松江で地域差を出せますが、オンラインだとなかなか難しい。オンライン上で地域差を出すには、どのようにすれば良いか、まつもとさんからアドバイスはありますか**

**まつもと：**コロナ禍でなくても、東京で開催するイベントは、遠慮なくオンラインにすれば良いと思っています。東京はすごく便利なところですが、東京以外の人をだいぶ切り捨てているか、あるいは、東京ではない人に、だいぶ負担を強いているのですね。

最近では減りましたが、私がさまざまな方とメールなどでお話しをしていると「ぜひ、お会いしたいです!」と言われるのですが、「それでは、島根からの飛行機代を負担していただけるのですか」と聴くと、「東京に住んでいると思っていました」とおっしゃられるケースが結構ありました。イベントの主催者側は、スピーカーをするような人たちは、みな東京に住んでいると思いがちなですね。

東京にいる人たちは、自分たちが恵まれていたということを、あまり意識していないのです。地方にいる人たちは経済的な負担もあるので、それほど頻繁に東京へ行けなかったりするので、必然的に得られる情報量は限定されるのではないかと思います。

そういう意味で、東京で開かれるイベントのほとんどをオンラインにすれば良いと思ったのです。それこそ、テクノロジーの進化で、場所に関わりなく、すべての人が同じ恩恵を受けられるようになってきましたからね。

逆に、ここ数年はコロナ禍でイベントの地方開催は難しいと思いますが、観光とジョイントした形でイベントを開催するのはどうかと思っています。日本で開催されている「RubyKaigi」は、ここ数年ずっと地方で開催しています。それは、地方の人たちが参加しやすいというよりも、むしろ「その場所に行き、その場所ならではの体験ができる」ことを前面に押し出しています。「イベントに参加したついでに、観光もしてってください」という建て付けでイベントを開催するのです。その場所に行った甲斐がある地方のカンファレンスを開催しているのですね。

このような、物理的に現地へ行くことに意味のあるイベントは地方で開催し、どこでやっても良い(変わらない)ものはオンライン開催にすれば良いと思います。



まつもと氏はインタビュー中、終始にこやかに話しいただいた

### リアルでは最後になりましたが、2019年に福岡で開催されたRubyKaigiは、参加者が1,500人も集まり、すごく盛り上がっていました

福岡県もすごく協力してくださいました。それは、日本全国から1,000人を超える人たちが集まり、その人たちが泊まる・観光する・食事をする事で大きな経済効果があると分かっているからです。松江ではRubyWorld Conferenceを毎年11月に開催していますが、その際はたくさんの方に松江に来ていただき、宿泊や観光で産業振興にも貢献できました(※編集部注：2019年はリアル開催。2020年は12月にオンラインで開催された)。

### 確かに、イベント主催者が1人勝ちというよりも、さまざまな人たちを巻き込んで、みんなが楽しんで盛り上がる建て付けにできると良いですね！

**まつもと：**このようなイベントであれば東京で開催しても良いのですが、東京に住んでいる人は多いですし、東京で開催すると、さらに東京に人が集まってしまうだけなので、あまり面白みがありません。だから、独自性のある土地柄で、地方の人たちが「めったに参加できないけど、〇〇でRubyのカンファレンスやるなら行ってみようかな。ついでに観光でもして楽しんで来よう」といった建て付けだと、やりがいのある形になっていくのではないのでしょうか。

あと、イベントがオンライン化されたことで一番失われたものは「エンジニア同士の交流」です。講演自体はリアルタイムで聞かなくても後からオンラインでほぼ再現できますが、エンジニアが廊下で立ち話をしたり、部屋に集まって議論したりとか、そういったことはリアルでないとなかなか難しいですから。

私も、いくつかオンラインカンファレンスに参加しましたが、このような交流を再現できたことはほとんどありませんでした。これをどうしていくかというのは、大きな課題だと思います。いろいろなWebサービスで再現しようという試みはありますが、今のところ、あまりうまくいっていないようです。

### 最後に、Think ITの読者であるエンジニアへ向けて、メッセージをいただけますか

**まつもと：**私自身ずっと考えていたことですが、大事なものは「選択肢」だと思っています。一面的に決められるものはあまりなくて、東京に住むか地方に住むかという話でも、地方に住むがゆえに諦めなくてはいけないものも、いくつかあるわけです。

例えば、アイドルの追っかけをしている人たちは、多くが東京を選ぶのではないのでしょうか。島根に住んでいる人たちも、アイドルのコンサートに行こうと思ったら東京なり、大阪なり、広島なり、わざわざ飛行機などに乗って行かないと楽しめません。ほとんどのアーティストは島根県にはめったに来ないので。

一方で、地方には通勤時間や家賃、自然環境などプラスになることもたくさんあるので、「その中で何を大事にして、何を諦める」のか。トレードオフですよね。エンジニアは必ず、このトレードオフに直面します。

「どこに住むか」を決断するにもトレードオフは発生しますが、本人の望まない形で、それが強制されたりしなければ良いですね。「コンサートを愛しているから東京に住みたい」という人は東京に住めば良いし、「もうちょっとのんびりした所に住みたい」という人は、島根でもどこでも、住みたいと思うところに住めば良い。「東京の会社に就職したのだから東京に住むべき」とか「IT業界に身を置いたからには大都会に住まなければならない」とかではなく、複数の選択肢を持って自分で選択できるようにしておくことが大事だと思います。

とは言え、東京にも地方にもそれぞれプラスマイナスがあるので、それをどのようにトレードオフと捉えるかは人それぞれですが、純粋に仕事だけを考えるなら、テクノロジーの進化で場所の制約はだいぶ減ってきていますし、これからも制約はどんどんなくなっていくのではないのでしょうか。初めにも言いましたが、今回のコロナ禍で、社会が良い方向に前進する圧力がかって、大きな変化が起きているのではないかと思います。

コロナ禍以前から、島根に地縁のある方、ご家族や親戚が島根にいらっしゃる方などは、島根への移住を積極的に考えてくださり、過去に私の会社を含めて、島根のIT企業へ転職して来てくださった方はたくさんいらっしゃいます。私自身の期待でもあるのですが、今後は「縁もゆかりもないけど、Rubyがあるから島根に引っ越そう!」という方が増えてくれると嬉しいですね。

**まつもとさん、ありがとうございました!**

※編集部注：本記事は2021年6月に行った取材を元にしたもので、現在の状況とは変わっている可能性があります。

# チャレンジしたいエンジニア必見！ —「やってみたい」を叶えに来てほしい

Think IT  
White Paper

10

● 望月 香里

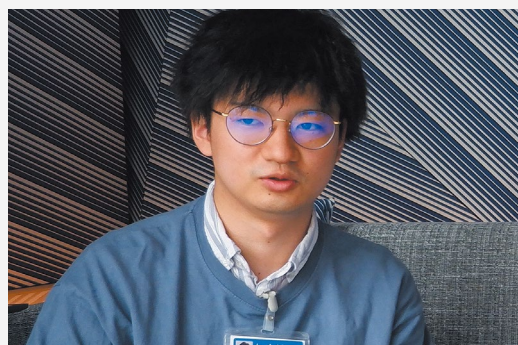
本記事では、福岡県北九州市にある「GMO kitaQ(GMOインターネット 北九州オフィスの愛称)」で働く3名のU/I/Jターンエンジニアに、なぜ北九州を選択したのか、またGMOインターネットで働くことのメリット、普段の働き方などについて伺った。

まずは、今回のインタビューに応じていただいた3名のエンジニアについて、出身地と現在の業務内容、そしてGMOインターネットへ就職した理由を1名ずつ紹介する。

## ■角田 怜氏

### 「Iターン・文系からエンジニアへ」

大阪府出身。Windowsに関連する商材を開発。大学は文系の公務員向けの政策学部で地方創生を研究、卒業論文のテーマは「IT技術者の地方移住」だった。就活はコロナ禍もありオンラインが中心。シンクタンクを志望していたが、ITの将来性を見出し、地方移住の研究の前に、自分がエンジニアになってみようと思いを決断し、面接を受け、今に至る。

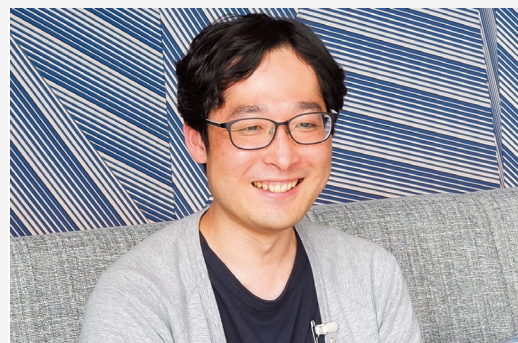


GMOインターネット株式会社 角田 怜氏

## ■桑原 謙吾氏

### 「Uターン・地元に近い立地へ」

福岡県出身。大学卒業後10年間、東海地方でLinux OSの開発・サポートに従事。地元に戻りたいと思っていたこともあり、10年目を境に地元福岡市へUターン。立地が福岡に近い、当時下関にあったGMOグローバルサイン・ホールディングスへ転職。



GMOインターネット株式会社 桑原 謙吾氏

## ■関 芙美恵氏「Jターン・家族の近くへ」

山口県出身。アプリケーションのセキュリティチェックを担当。地元高専を卒業後、新卒で東京のSlerに就職、2年間働いた。家族の事情もあり、何かあればすぐに駆けつけられる場所で働きたいと考え、当時下関に事業所のあったGMOクラウド(現GMOグローバルサイン・ホールディングス株式会社)に応募。入社のタイミングで転籍や組織の編成があり、GMOインターネットに配属。



GMOインターネット株式会社 関 芙美恵氏

## 「明るく和気藹々、チャレンジしやすい」

ここからは、座談会の様子をQ & A形式でお送りする。

### — エンジニア歴10年以上の桑原さん。GMOの良いところは



桑原

風通しがよく積極的に自分の意見や希望を伝えることができる。もちろん単なるワガママでは意見は通らないため、自発的なアクションを起こせる会社だと思う。若年層が多いためか、良い意味で和気あいあいとしている。社内イベントもあり、自分たちも仕事を作っている感じ。明るく元気に仕事ができるところが魅力。

Think IT  
White Paper

11

### — 地元近くで働きたいという想いがあった関さん。 GMOの雰囲気はどのように感じましたか



関

一般的なSlerを例に挙げると、システムエンジニアやプログラマーの仕事は1人で成り立ちやすいため、隣の部署が何をしているか、あまり知らないケースが多いと思う。GMO kitaQはオフィスも開放的で明るく、横のつながりがあるのが特徴的で、コミュニケーションがかなり多いほうだと思う。比較的新しい拠点なので、やりたいことやチームとして進めたいことなど、発信できる力があると聴いてもらえる。「一緒に作り上げる、チャレンジできる土俵はある」と思う。また、交通アクセスも良く、土日に気軽に実家(山口県)に帰ることができ、リフレッシュもしやすい環境だと感じる。

### — GMOインターネットでは、どれくらい女性エンジニアが所属していますか



関

GMOインターネットではエンジニア職における女性の比率は24%に上っている。GMOインターネットには、実績から見ても若手や女性がチャレンジできる環境があると感じている。最近、女性エンジニアの志望も多く、若手の採用に関わることもある。

## 「都会からも田舎からも丁度良い」

### — オフィスのある北九州市の印象は



桑原

福岡市は、天神未来創造「天神ビッグバン」プロジェクトを推進するなど、積極的にIT企業を誘致している分、エンジニアにとって働きやすいがゆえに、人口密度は高く感じる。北九州市の方が、ゆったりしている。



関

山口県は車がないと生活できない。福岡市は徒歩でどこにでも行けたり商業施設が充実しており良いと思うが、北九州市は、少し歩けばすごく広い公園があったり、歴史的に重要な建築物があるなど、文化面でも子育て環境にも向いている場所だと感じる。コンパクトだが、足を伸ばすと良いところがたくさんあり、物価も高くなくて住みやすい。



角田

僕は車が必要だと感じ、昨年10月に購入した。駅周辺では不自由なく生活はできるが、行動範囲が広がってくると、出かけには車が必要になると思った。車で1時間半も走れば別府温泉など、観光地にもアクセスしやすい。

— 地方創生が卒論のテーマだった角田さん。  
実際に2年過ごしてみて、実際どのような印象か



角田

地方に住んで良かったことは、働きやすさ。大学の研究でも通勤時間が圧倒的に少ないのは地方の良さだと考えていたが、徒歩10分など電車に乗らなくても良いというのは大きなメリットだと実感している。家賃の安さも地方の魅力。反面、IT企業やITイベントの会場は東京に多く、技術力向上やエンジニアとの繋がりという面では、東京が優勢と感じる。



インタビュー中の雰囲気からもエンジニア同士の仲の良さが伺えた

## 「チャレンジしやすく、声を上げやすい」

— 今後GMOインターネットでやっていきたいことは



桑原

現在、出来上がっているサービスを保守する運用保守から、新しいサービス・システムを1から作っていくインフラ開発チームを立ち上げる業務に取り組んでいる。そこに優秀な新卒が来てくれたら嬉しい。また、社内からキャリアチェンジするなど、新

しい流れで人を増やしていきたい。GMOインターネットはチャレンジしやすい会社だと思う。手をあげて変えていくこともできるし、会社の体制が変わることもあり、刺激があって面白い。



関

後輩エンジニアを育てていきたい。自ら成長する人と、業務をベースにして成長する人と、それぞれ得意分野があると思っており、双方の土台作りのできる立場になりたい。

— 新卒2年目の角田さんは、今後どのようなエンジニアになっていきたいか



角田

だ半人前なので、まずは早く一人前になりたいと思い業務に励んでいる。現在は渋谷の開発チームの仕事をしているが、今後はGMO kitaQで独自のサービスを開発できるようになっていきたい。

— 最後に、読者へ向けてひと言をお願いします



関

エンジニアにはずっと同じことやりたい人と、変わったことや新しいことをやっていきたい人がいると思うが、「エンジニアとしてチャレンジしたい」という炎がくすぶっている人にGMOインターネットは向いていると思う。



角田

新人でも「やりたい」と声をあげやすいのは、大きな魅力だと感じている。



桑原

変化に柔軟に対応できる人・チャレンジしたい人は、面白いと思う。

— 明日にも新しいサービスが出てくるかも知れないというIT業界。そこを主戦場とするエンジニアにとって、変化に柔軟に対応できるメンタルを持つことも大切ですね。ありがとうございました！

「いつかは九州に帰りたい」と口にする人が多い、郷土愛を感じる場所。中国に近いので黄砂などによるPM2.5注意報が発令されることもあるが、地盤は固く、地震などの自然災害は少ないそうだ。

就職先を選ぶ際、休日含む日々の過ごしやすさや快適さを重点に置いてみてはいかがだろうか。新卒でも中途でも変わらずに、とてもゆったりした環境の中で仕事している空気を感じた。

# 「富山への愛」から生まれた事業所ならではの自由闊達な雰囲気と 抜群のチームワークが自慢

Think IT  
White Paper

14

● 工藤 淳

働き方改革やダイバーシティへの関心が高まる中、IT業界でも東京などの大都市を離れ、より生活環境のよい地方を選択する人が増えている。そうしたU/I/Jターン組や現地採用の動きが盛んになる中で、地域出身者の積極採用や地元へ根差した活動を志向して活動を広げているのが、クリエイションライン株式会社の富山事業所だ。ここでは、人事や教育などの現場で活躍中のスタッフに登場いただき、その活動ぶりや事業所への思いを語っていただいた。

## 富山出身者たちの熱意から生まれた「みんなが集まる拠点」

クリエイションライン株式会社富山事業所は、コロナ禍が始まる以前の2018年に、富山県富山市に現地出身者を中心として新たな事業所を開設。東京本社と連携して開発業務を手がける一方、地域社会や地元企業との新たな連携のためのビジネス創出を探っている。

これまでもメーカー系のITベンダーならば、地方の得意先に合わせて拠点を置くのは珍しいことではなかった。また最近では、コロナ禍によるリモートワークの拡がりをバネに、地方勤務のエンジニアなどのネットワーク構築を試みる例も増えてきている。

とは言うものの、クリエイションラインは、東京の本社もあわせて総勢約250名の会社だ。小回りの利く組織ならではのリモートワークの方が、フットワークも、またコスト面でも有利なのではと思うのですが、あえて富山県という離れた場所に拠点を置いた理由は何だろうか。富山事業所 所長の池田卓司氏は、ひとえに「富山県への愛」だったと設立の経緯を語る。

「ここを開設した人たちが富山出身で、地元への愛着が強くてついに事業所を設立したというのが発端です。実際に私も含めて社員には富山を始め北陸の出身者が結構いるんです。私も地元にながら2012年から5年間、リモートワークで仕事をしてきました。そのうち同郷の人間も増えてきたし、みんなが集まる拠点が必要だなという話が出て、じゃあ作ろうかと、当時の上司たちが発案しました。社長も結構そういう軽いノリが好きなので、それなら作ったらいいよという感じで事業所開設が実現したのです」

もちろんそれだけではない。それまで東京だけに限られたビジネスエリアを拡大する第一歩として、また将来的に事業が拡大してエンジニアを増員するとなったときに、まずはこの富山を拠点に採用ネットワーク



クリエイションライン株式会社  
富山事業所 所長 池田 卓司氏

を拡大していく目的もあったと池田氏は明かす。

## 事務所探しから人材募集まで初めての経験を1人で乗り切る

池田氏が富山事業所の責任者を任されたのは、事業所立ち上げのときに「けっこう無理やり(笑)」だったという。もともと富山在住だった同氏は、2012年にエンジニアとして入社。東京に行く話もあったが、家族もいるし家も買ったしということで、ずっと地元からリモートワークで仕事をしてきた。それが事業所開設が決まったとたん所長に任命され、予算も渡されて事務所の立ち上げに奔走することになった。

「それまでずっとエンジニアでやってきたのが、自分1人で何をどうしていいのか全然わかりませんでした。とにかくあるのは部屋だけで机も何もないので、備品の購入から人事、総務まで全部、試行錯誤でやっていったのが始まりです」

まったくゼロからの立ち上げとあって、池田氏は物件探しからリフォームまでを1人でこなし、部屋を確保した次は最低限のインフラとしてインターネットを引いた。そうしてルーターも床に置いたまま、あぐらをかいてノートパソコンを叩き、少しずつ備品の購入を進めていったという。そんなわけで「2018年の事業所起ち上げ当初は、ほとんどエンジニアとしての仕事が手につかなかった」と振り返る。

奮闘のかいあって事務所の形が整ったら、次は人の手配だ。とりあえずハローワークに会社登録をして、求人票を出すことからスタートしたが、ここで池田氏は、人材獲得のために独自のアピール作戦を敢行した。

「登録や求人票のちょっとした変更などはファックスで済むのですが、ハローワークの担当さんに顔を覚えてもらうために、わざと毎回向こうまで足を運びました。それでクリエイションラインの池田というのをアピールしているうちに、何件か問い合わせが来るところまでこぎつけました。人事面でのちょっとした営業活動みたいなものですね」

やはりリアルのコミュニケーションは大事だと、このとき池田氏は改めて痛感したと言う。

## 県や早稲田大学との協働によるインターンシップなどに力を注ぐ

池田氏は富山事業所の今後について、「せっかく富山に根を張って活動しているのだから、地元の企業の皆さんと何か新しいことができたらいと思っています。そのためにも、生活環境の面で非常に良い土地に住んでいるので、その良さが理解できる人をもっと増やして、そこから地元企業とのつながりを増やしていくのが目標の1つです」と展望を語る。

そうした富山の良さに惹かれて地域に戻ってくる、いわゆる「U/I/J ターン」の人たちの取り込みに富山県は力を入れており、富山事業所も協力を依頼されているという。最近ではU/I/Jターン層を対象にしたセミナー用に、富山の良さや就職先をアピールするビデオメッセージの制作に加わった。またU/I/Jターンに限定せず、富山県内のIT企業の代表として、各産業をアピールするセミナーにクリエイションラインが登壇したこともあるとか。

「また学生向けには、早稲田大学と富山県が協力して新規事業創造プログラムというものを毎年開催しています。内容は、早稲田の学生と県内の企業がペアを組んで、富山県における地域イノベーションのアイデアを考えるというものです。このプログラムには学生のインターンシップも含まれていて、

2021年の8～9月、当社もアピールを書いて参加しました。もう4年くらい続いていて、この年はコロナ禍でZoomで開催したのですが、皆さんの熱意が伝わってくる非常に良い催しになりました」

インターンシップでは、クリエイションラインの業務を知ってもらうのはもちろんだが、池田氏はそれにも増して、富山事業所の「いい雰囲気」を感じてもらいたいと強調する。クリエイションラインでは、もともとコアタイムのないフレックスタイム制度を実施しており、社員は自分のペースに合わせて出社すればよい。

「そういう会社の制度や文化そのものが、他の企業とは大きく違ってしています。それに加えてこの富山事業所はチーム同士の仲も非常に良いし、若手や中途入社の人にも周りの人が積極的に仕事を教えたり、支えたりする風土があります。ぜひ実際に来て、見て、話をする中で体感していただきたいと願っています」

最近では事業所のTwitterのアカウント宛に、ダイレクトメールで問い合わせが来ることもある。「ぜひ気軽に連絡して、私たちの富山事業所の良さをご自分の目で確かめてみて欲しいですね」と言う池田氏だ。

## 人事採用では「みんなと成長し、将来を目指せる人」に期待

富山事業所の人たちに話を聞いてみると、共通しているのが「職場の働きやすさ」だ。開発者を育てる姿勢や教育制度などはもちろんだが、もう1つの特徴に「各人のライフスタイルや事情に即したフレキシブルな働き方ができる」点が挙げられる。同事業所で人事(採用担当)・総務を担当する辻 佳那氏も、そうした特色を大いに歓迎している1人だ。

辻氏はこれまで医療機関やメーカーで、新卒採用や労務手続きなどの人事総務業務を経験。2021年にクリエイションラインに入社して、富山事業所のエンジニア採用や総務関連の業務を担当している。一児の母でもある辻氏が入社を決めたきっかけは、ホームページや面接を通じて感じた、あたたかい社風に惹かれたことと、同事業所のフレキシブルな勤務体制だったと振り返る。

「前職ではフルタイムで遅い時刻まで働いていましたが、子どもが小さいこともあり、勤務時間に融通がきいてプライベートを大切にできる会社で働きたいと思っていました。現在は16時までの短時間勤務なので、子供とゆっくり話したり一緒に過ごす時間ができて、すごく充実しています」

現在の辻氏のメイン業務は、人材採用だ。人事畑は長いIT業界は初とあって新たな発見の連続だが、エンジニアならではの何ごとも深くロジカルに掘り下げて考える姿勢や熱意は、自分の仕事にも大いに参考になっているという。

「応募者の方にも、これまで作ったプログラムなどをよければお持ちくださいと伝えているのですが、実際に拝見するたび、本当にその方が好きで熱意を持って取り組んできたというのが門外漢の私にも鮮明に伝わってきます。こういう方が大勢いるのは、やはりIT業界ならではの素晴らしいところだと感じています」



クリエイションライン株式会社  
富山事業所 辻 佳那氏

現在、富山事業所における新卒のエンジニア採用で軸となっているのがインターンシップだ。富山県の運営するWebサイト「INTERNSHIP NAVI とやま」を募集に活用していることもあって、応募者も県内の高専生、大学生が多いと辻氏は語る。

「インターンに来てくださる方はもともと意欲が高く、実際にインターンシップに参加してからも当社の仕事に強い関心を持って質問してくれたり。当社では社員同士のコミュニケーションやチームプレーを重視しているので、進んでその中に入って打ち解けてくれる方が多いですね」

そんな辻氏が、採用担当として最も重視しているのが「みんなと一緒に成長し、その先を目指していけること」だ。この背景には、クリエイションラインの掲げる企業理念「HRT + Joy」があると同氏は明かす（HRTはHumility(謙虚)、Respect(尊敬)、Trust(信頼)の頭文字を組み合わせたもの。そこにJoy(喜び)を足し、企業理念に)。

「当社では、勉強したり技術を磨く場合も、自分だけが伸びれば良いのではなく、一緒に働く人たちと目標を共有して、ともに成長し将来を目指すという考え方を大切にしています。そうやって皆で力を合わせながら、お客様に貢献したり、世の中にプラスになる何かを提供することに喜びを感じる方を、採用担当としていつもお待ちしております」

## 大学生とのインターンシップを通じて得た「熱い手応え」

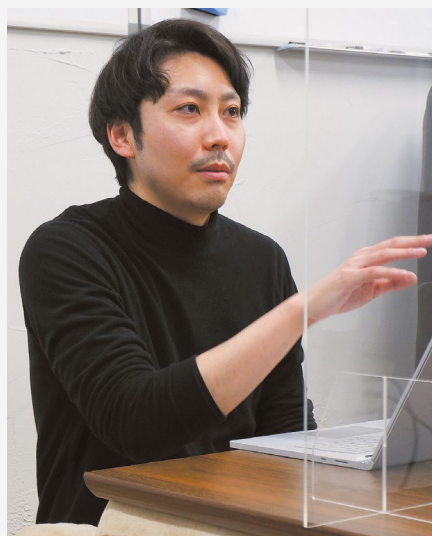
一緒に目標を目指し、喜びを分かち合うメンバーを育てるとなれば、当然重要になるのが人材教育だ。同事業所のエンジニア教育を担当する十松和生氏は、カリキュラムの研修などを指導する講師として、日々新卒者や中途採用の研修生に向き合っている。

「そうは言っても自分自身、エンジニアのキャリアは2019年に事業所の起ち上げ時に入社してからで、まだ3年目に過ぎません。それが2021年7月から講師を担当することになって、これは自分に務まるのかとも思いました。それだけに、現在でもまず自分で勉強して、そこで学んだことを若い人たちに伝えるという気持ちで取り組んでいます」

国立の工業系大学院を修了して高度な専門知識はあるものの、富山事業所に入るまでは役者として舞台上に上がっていたという異色の経歴を持つ十松氏。今の職場に入ってから、先輩の2人につきっきりで指導してもらったおかげで、ここまでスキルを伸ばすことができた振り返る。

「今でも、何回も試行錯誤しているうちに教え方が見えてくるといった経験を通じて、少しずつ着実に前に進んでいる感じがしています。また教わる側の若手メンバーも、私がそうやって四苦八苦しているのを心配して逆にフォローしてくれたり、進んでいるんなことにチャレンジしてくれたり。そういう支えが、とてもありがたいと思っています」

そうした十松氏にとって、ひととき大きな手応えを与



クリエイションライン株式会社  
富山事業所 十松和生氏

えてくれたのが、2021年に開催された早稲田大学の学生とのインターンシップだった。これは「富山県新規事業創造インターンシッププログラム」の一環として、県内の複数の企業と早稲田大学の学生が合同チームを作って行うものだ。

今回はコロナ禍のため完全リモート開催となったが、クリエイションラインの2名と学生3名でチームを作り、富山県の地域に貢献できる新しいイノベーションの企画に取り組んだ。テーマに沿ってディスカッションを進め、最終的に県や大学の関係者の前で発表するが、良い企画ならば会社の新規事業として採用される可能性もある。

「3週間くらいかけて、かなり真剣に密度高く議論を重ねていきました。最終発表をチーム全員で行ったのですが、関係者の方から好評を得ることができました」

十松氏はこの体験を振り返って、「最後まで頑張ろうと思って続けられたのは、やはりメンバーと打ち解けて熱くなれたから」だと明かす。

「毎日いろんなことを話しながら良い関係を築いてきた積み重ねが、彼らと一緒に最後までもうひと踏ん張りしようというモチベーションにつながったと、改めて思います。これは仕事でもまったく同じであり、入社するまでは1人で何でも抱えてしまいがちな私が、まったく正反対の考え方に変わる大きなきっかけになりました」

## いつかは富山事業所初のプロジェクトをチームで実現したい

富山事業所のスタートアップメンバーの1人であり、現在はエンジニアのリーダー格として、インフラ系を中心にさまざまな開発を手がける新森寛治氏。同氏がメンバーに加わったきっかけは、現在の事業所所長である池田氏の誘いだった。2人は新卒で入った会社の同期で、その後、別々の会社に転職した後も連絡を取り合う仲だったという。

「もともと富山出身だったのが転勤で東京に4年くらいいて、いつかは富山に戻りたいなと思っていました。そこに池田さんから久しぶりに連絡をもらい、『新しい事業所を起ち上げたのでぜひ頼む』と言われて『じゃあ行きます』と。東京で家庭も持って楽しく過ごしていたので迷いもありましたが、新しいことを始める良い機会だと決めたのです」

事業所のスタート時のメンバーは、わずか3人。ゼロからのスタートで大変なことも多かったが、これから大きくなっていく期待感や、自分たちで自由にやりながら、いろいろなことにチャレンジできるワクワク感があったと、新森氏は当時を振り返る。

現在の同氏は、現役のエンジニアとして仕事をこなしながら、同時にチーム全体をまとめていく立場も担っている。

「いま事業所には9名ほどメンバーがいますが、各自で別のプロジェクトを回しているので、いずれは全員



クリエイションライン株式会社  
富山事業所 新森寛治氏

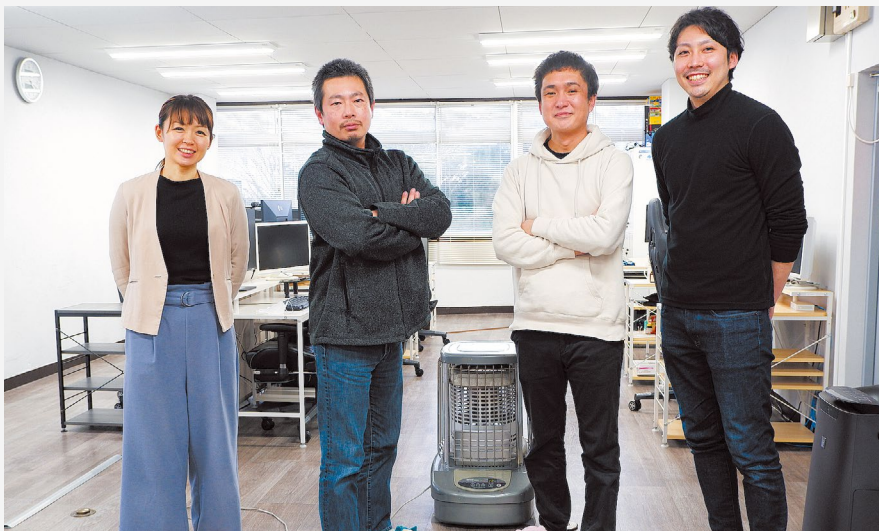
でスクラムチームを作れたらと思っています。富山事業所発のプロジェクトみたいなことをチームでやっていけたら絶対に楽しいし、そういうチャレンジを経験することでさらにチームの気持ちをひとつに固めていけると信じています」

そのためにも、今手がけている分野や技術を深掘りするだけでなく、その技術を使って自分が何をしたいのか、自分は何を作りたいのかといった目標をエンジニアには持って欲しいと新森氏は語る。

「例えば『Web アプリを作りたい』とか『自分でもインフラを組んでみたい』という気持ちがまずあって、それならこういう技術を身につけようと考えるようにすれば、それだけで知識やスキルの吸収が格段に違って来るはず。その意味でクリエーションラインは、自分の腕前もモチベーションもアップできる場だと思います」

「HRT + Joy」のスローガン通り、社員1人ひとりを大切に一緒に仕事に取り組むことを楽しむ。「黙ってこれをやれ」みたいな縦社会ではない。また出社とリモートワークを自由に使い分けて、チームワークの楽しさと1人で集中する時間を選べるのは、富山事業所ならではの良さだと新森氏は付け加える。

「やりたいことをどんどんやらせてくれる場があって、自分のやってみたいことはほぼ実現できる会社だと私は思っています。そういう意味では、みずから意欲を持って自分のテーマを追求している人には、より成長しやすい職場ではないでしょうか」



取材に応じてくれたメンバー 4 名で記念撮影。写真 1 つ撮るにもにぎやかでチームワークの良さが伺える

## 取材を終えて

「チームワーク」「成長」「楽しむ」というキーワードと想い。取材を通じて、富山事業所のメンバーがこれらをととても大事にしていることが強く感じられた。また、もう1つ重要な点は、メンバーそれぞれがしっかりと目標を持って日々の業務に取り組んでいることだ。なんとなく目の前の仕事をこなすのではなく、「なぜ」「なんのために」仕事をしているのか、明確にされていると感じた。

富山事業所はフレンドリーなメンバーに囲まれ、アットホームな雰囲気で働ける職場だ。また、富山という土地自体も風光明媚な景観と、豊富な海の幸を楽しめるといった魅力がある。コロナ禍でテレワークが当たり前の世の中になりつつある今、「どんな会社で働くのか」も大事だが、「どこに住むか」も大事な要素だろう。ぜひ1度富山県を訪れ、その魅力に触れてみていただきたい。(Think IT編集部：伊藤 隆司)

# ますます盛り上がりを見せる 島根・松江市のIT産業。 なぜ島根にITエンジニアが集まるのか —ちょうど良い環境は価値—

● 望月 香里

コロナ禍の中でU/Iターン・二拠点生活・移住・ワーケーション・起業・独立など、ITエンジニアが集まる街としてエンジニアからさらなる注目を集める島根県松江市では、2006年から産業振興事業としてオープンソースとプログラミング言語Rubyを掛け合わせた「Ruby City MATSUEプロジェクト」を推進している。

本記事では、Ruby City MATSUE プロジェクトきっかけに、松江市に開発拠点を設立したパソナテックと、パソナテック島根LabにU/I/Jターン就職した3名の社員への取材レポートを紹介する。共通のテーマは「なぜ松江なのか」だ。

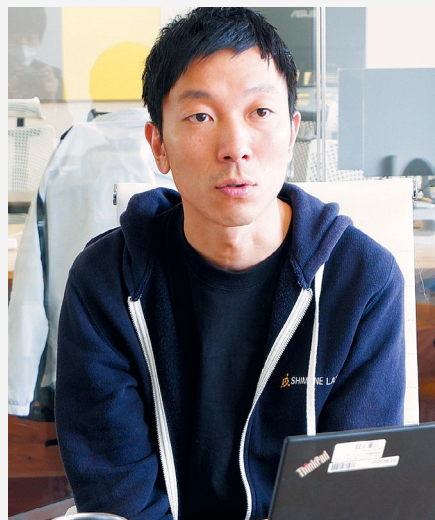
## 「なぜ松江なのか」—その想いは三者三様

はじめは、パソナテック島根Labに所属するU/I/Jターン3人の社員による、座談会形式のインタビューだ。

### Jターン・家庭軸と新しい仕事への興味

まず、移住前の経緯を1人ずつ紹介する。1人目は、Jターンの田窪大樹氏。大学卒業までは、地元の大阪で過ごし、新卒でパソナグループに入社。東京本社にて、求職者を対象にしたマーケティング業務に従事。2017年9月、パソナテックが島根拠点開設の際、奥様が鳥取県大山町出身ということもあり、自ら志願して松江市にきた。東京で共働きしていた際、いずれ親の近くに住めたらと、話していたタイミングだったそうだ。

東京でのマーケティングの仕事は面白かったが、既存のものを1から100にする内容が中心だった。一方で、0から1にする仕事に興味があり、奥様の実家に近い山陰エリアだったこと、そして新しい仕事への興味で松江市へ。



株式会社パソナテック  
島根Lab マネージャー 田窪大樹氏

### Uターン・改めて気づく地元の良さ

続いては、Uターンの福井大地氏だ。福井氏は松江市出身で、学生時代の専攻は情報系。異業種で1年

間働いたのち、都会への興味で大阪へ。学生時代の知識を活かそうと、パソコンのテクニカルサポートの仕事に従事。ものづくりが好きだと気づき、現在のエンジニア歴は6年目。

大阪で結婚し、大阪を拠点に生活していくつもりだったが、奥様とともに松江市を訪れた際に、地元の良さを再認識。IT業界はリモートワークもできそうだと感じ、Uターンを意識し始めた。そして情報収集を目的に大阪で開催されていたU・Iターンのイベントに参加した際に、パソナテックの田窪氏と出会う。田窪氏から仕事の内容や働く環境などの説明を受け、Uターンを決意。2020年7月にパソナテックへ転職後、松江市へ。

### Iターン・新入社員を大抜擢！

3人目は、Iターンの竹中浩太郎氏。大学卒業までは、地元の京都で過ごす。在学中はオーストラリアへの留学経験もある。現在パソナテック2年目。新卒入社で、2020年7月まで東京で研修し、未経験ながらエンジニアとして島根Lab初の新人赴任となる。



株式会社パソナテック 島根Lab エンジニア  
福井大地氏



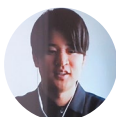
株式会社パソナテック 島根Lab エンジニア  
竹中浩太郎氏

## — 実際に松江に来て、どのように感じられたか



福井

松江と言えばRubyが有名で、複数のIT企業が島根に拠点を構えており、新しい技術にも触れることができる。松江でなければこういう機会も少なかったかもしれない。日々学びがあり、充実している。



竹中

松松江の雰囲気は、地元の京都と似ていて、特に困ることはない。パソナテックに入社後は、コロナ禍ということもあり、ほとんどがテレワーク。自宅のデスク周りのツールも整えており、不便なこともない。



田窪

私が島根Labの立ち上げ責任者になるにあたって、①エンジニアの採用、②エンジニアが成長できる教育体制・教育環境の構築、③自治体や教育機関と連携した地域活性、という3つのミッションがあったが、進め方は会社からある程度一任されていたこともあり、立ち上げの面白さを実感できた。同業他社との情報交換も定期的に行っており、例えば今年のゴールデンウィーク前の4月28日には、他社と合同のオンラインIT大会を行った。お互いに興味のある技術やプロジェクトを共有する機会を設けることで、県内のIT業界全体を底上げしていくための盤石なネットワーク作りができていると感じる。

## — 1度地元から出て、また戻ってきたときに、どのように見え方は変わったのか



福井

大阪から松江に戻って来て、地元を自転車で走りながら、改めて自然の豊かさと景色の良さを感じた。今後、都会より自然が豊かな場所で子どもも育ててあげたいと思っている。大阪は人が多く、毎日お祭りをしているような感覚で、初めは通勤だけで体力を消耗していた。

## — 地元の京都から移住してきて、松江での暮らしはどのように感じているか



竹中

街並みや雰囲気は、それほど地元と変わらない。飛行機で東京へも1時間半ほどで行けるし、大阪まで車で日帰りもできるので住むには困らない。

## — 田窪さんは大阪出身で東京の企業に就職し、その後島根へ。島根の印象は



田窪

島根は大阪や東京と比べて人口は少ないが、かと言って田舎すぎないところが良い。年齢によって、感じ方は変わると思うが、自分はライフスタイルの変化とともに移住できて良かった。小児医療費助成があること、都市部と比べて保育園に入りやすいこと、休みの日のレジャースポットもたくさんあったりと、子育て環境はかなり良い。

## — 今後、松江でやっていきたいことは



福井

パソナテックに入社して、地方創生にも興味を湧いてきたので、コミュニティ企画に参加するなど、これからエンジニアを目指す方にも、自分の知り得たIT業界における知見を共有・還元していきたい。



竹中

自分の技術力の向上とともに、学生時代にオーストラリア留学で鍛えた英語力を駆使して外国人エンジニアとのコミュニティを広げたい。



田窪

移住して3～4年経つ。都市部にいたときよりストレスが減っている体感もある。テレワーク・複業など、自らの新しい働き方を開拓しつつ、伝播させていきたい。

— 松江に来て、地方ならではのマネジメントの難しさなどはあったか



田窪

島根Labは、職場環境はもちろんのこと、人間関係も非常に良好で、メンバーからも積極的にさまざまな提案が上がってくる。一方で、普段は自分自身も含め、メンバーは目の前の地域の方々と対峙しながら日々仕事をしている。大切なのは、メンバーが取り組んでいる仕事の内容や得られた知見・成果を、スムーズに東京本社にも共有していくことで、それが私の役割だと考えている。

— お三方、ありがとうございました！



インタビューの様子。この日は竹中氏のほか、東京本社から広報の森 真紀氏がオンラインで参加

今回は松江に開発拠点を開設したパソナテックの取り組みを紹介したが、現在までに、その企業数は40社以上になるという。松江市の定住企業立地推進課(企業誘致・Uターンサポート)によると「行政による支援も、ここ数年は既存の企業サポートやパートナーとなりうる企業の誘致など、時と共にその支援も変わりつつある」と言う。

リモートワークが可能となった今、どのような環境に住み暮らすか。それは、人生の価値、豊かさに直結すると改めて感じた。人は暮らしの中で山が見えると心が安定すると聞いたことがある。ストレスフリーな暮らしは仕事においても関係すると実感している。あなたの自宅や職場から外を眺めたとき、山や自然は見えるだろうか。

※編集部注：本記事は2021年6月に行った取材を元にしたもので、現在の状況とは変わっている可能性があります。

シンクイット™  
ThinkIT

thinkit.co.jp

エンジニアのための  
オープンソース実践活用メディア

“オープンソース技術の実践活用メディア”をスローガンに、インプレスグループが運営するエンジニアのための技術解説サイト。開発の現場で役立つノウハウ記事を毎日公開しています。

2004年の開設当初からOSS（オープンソースソフトウェア）に着目、近年は特にクラウドを取り巻く技術動向に注力し、ビジネスシーンでOSSを有効活用するための情報発信を続けています。OSSに特化したビジネスセミナーの開催や、Web連載記事の書籍化など、Webサイトにとどまらない統合的なメディア展開に挑戦しています。また、エンジニアを含むクリエイターの独立・起業、フリーランスなどの多様化する「働き方」や「ITで社会課題を解決する」等をテーマに、世の中のさまざまな取り組みにも注目し、解説記事や取材記事も積極的に公開しています。



- 本書は、インプレスが運営するWebメディア「Think IT」に掲載された記事を再編集したものです。
- 本書の内容は、執筆時点までの情報を基に執筆されています。紹介したWebサイトやアプリケーション、サービスは変更される可能性があります。
- 本書の内容によって生じる、直接または間接被害について、著者ならびに弊社では、一切の責任を負いかねます。
- 本書中の会社名、製品名、サービス名などは、一般に各社の登録商標、または商標です。なお、本書では©、®、TMは明記していません。

## ご利用のお客様へ

このたびは弊社メディア特別編集号（電子雑誌版）をご利用いただきまして誠にありがとうございます。  
本電子雑誌版のPDFファイル（以下「本PDFファイル」）の取り扱いに関し、以下のとおりご案内いたします。

## ●本PDFファイルの収録コンテンツ

本PDFファイルに収録されたコンテンツ（情報・資料・画像等）（以下「本コンテンツ」）は、無償または有償で、株式会社インプレス（以下「当社」）が認めた方法に従ってのみご利用いただけます。本コンテンツは、利用者様ご本人の個人的な使用の目的でのみ利用することができるものとし、当社の事前の書面による承諾なく、企業内、店舗、サイトなどにおいて特定または不特定の多数に利用させることのほか、著作権法で認められている私的利用の範囲を超えて複製、貸与、公衆送信その他の利用をすることはできません。

## ●ご利用方法

本PDFファイルは、ダウンロードを行われた利用者様ご本人のみがご利用いただけます。企業内での複数名による本PDFファイルのご利用については、別途有料サービスとしてご提供させていただきます。詳しくは当社までお問い合わせください。

## ●著作権

本コンテンツの著作権は、当社又は当該コンテンツの著作権者に帰属し、許可なく複製、転用、販売、蓄積等著作権法で認められている私的利用の範囲を超えて利用することはできません。また、本コンテンツの内容を変形、変更、加筆、修正等することは一切できません。

## ●商標など

本コンテンツに含まれる商標、ロゴ等は、当社または当該商標、ロゴ等の商標権者の商標です。本コンテンツには、TMマークまたは®マークは明記していません。これらを私的使用以外の目的で無断に利用することはできません。

## ●免責事項

当社は、本コンテンツの内容について、妥当性や正確性について保証せず、一切の責任を負いません。また、本コンテンツの利用にあたり生じたいかなる損害についても、当社は一切の責任を負いません。本コンテンツをご覧いただくためのアプリケーション等のインストールに必要な接続等の費用は、利用者の自己負担で行うものとします。本コンテンツやURLは、予告なく変更または中止されることがあります。当社は、本コンテンツの変更、追加、中断または終了によって生じたいかなる損害についても責任を負いません。